
フェイク

カトラス

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

フェイク

【Nコード】

N8930B

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

銀座の高級クラブで、木村は男と知り合う。意気投合した二人、男から儲け話があると切り出され、

銀座の高級クラブで、男は酒を飲んでいた。

ここ、二カ月の間、男は土日以外、毎日のように来店するので、店の従業員で男の事を知らない者はいなかった。

ただ男の職業は謎だった。

男は高級スーツ、高級腕時計に身をつつみ、来店すれば、必ず、豪快に金を使うので、店では評判の男だった。

男は最近、入れ込んでいるホステスに、話しかけた。

「ちよつと、知りたいんだけどね、向かいの席に座ってる紳士、誰だか知ってるかい？ 顔は覚えてるんだけどね、でてこないんだよ。」

話しかけたいんだけどね、ほら 名前わからないと失礼だろ〜」

ホステスは、向かいの席の紳士の顔を少しみてから、男に言った。

「木村様ですよ、き・む・ら」

とホステスは意地悪ぽく言った。

「そうだった。木村さんだったね。たしかあ不動産屋だったかな」

「違いますよ、都内で手広くパチンコ経営なさってる方ですよ」

そう、ホステスから聞いて男はニヤツとした。

男は店のボーイを呼んだ。

「すまないがね、向かいの紳士に一番高いシャンパンを持っていてくれないかい」

「かしこまりました」とボーイが行こうとしたところ、ボーイの腕を軽くつかんで、

「必ず、私からだと言っただよ」と言っつて、ボーイのポケットに一万円札をつっこんだ。

「かしこまりました」

ボーイは嬉しそうに戻っていった。

しばらくすると、さきほどの向かいの紳士、木村がお礼のあいさつに男のところに来た。

「どうも、高い酒を頂いたみたいで」

「いえいえ、お気になさらないでください」

「ところで、どこかでお会いしましたか？」

と木村は男に聞いた。

「実は以前、私には無二の友ともいえる友人がいたのですが、先日、病気で亡くなった次第でして、その友人に木村様が似ていたものだったので、失礼だとは思ったのですが、お酒をお持ちした訳なのです」

「そうだったですかあ。いやいや、これは全く奇特な方だ」

木村は男が奢ってくれた訳がわかって、安心したのか大笑いした。

「これも、何かの縁ですよ、今日は大いに楽しみましょう」

男はそういって、ボーイにどんどん酒をもつてこさせた。

酒がまわってすっかり上機嫌になった木村が男にいった。

「さきほどから、奢ってばかりじゃ申し訳ない。今度何か私にお礼をさせてくださいよ」

それを聞いて、男はにやつとした。

「お礼なんて、とんでもないですよ。木村さんは、ほんと律儀な方だなあ」

正直わたくし、お金とか物には、全く興味がないんですよ。お金なんて使いきれないくらいありますし、誰かに寄付したいくらいです」

男は話を続けた。

「そうだ。木村さん、これ大きな声じゃ言えないですけどね」

そう言って、男は本題を木村にきりだした。

男の話によると、木村には親から譲り受けた莫大な資産があり、それを、元手に株式等に投資をしてさらに儲けているという。そして、木村にも自分に投資してみないかという事だった。木村は少し考えたが、男が絶対に損はさせないし、投資した金額を五倍にして

みせる。最初は一切お金はいらない、投資分のお金は男がたてかえる。木村が儲かってから、たてかえた分だけ返してくれたらイイという、なんとも、おいしい話だった。

ただし、一つだけ条件があつて、木村の持つてる資産を全部、男に見せてほしいといった。

なんで、男が資産を見せて欲しいといったか？ 木村は思ったが、男がただ単純に取引する相手の資産をみて、安心したいだけだと言つたので、見せるだけならタダだから、それぐらい問題ないと考えた。

そうして、木村は男に、住所と電話番号を教えて、翌日木村の自宅で落ち合う運びとなつた。

……無論、男は木村の住所とか素性は事前に下調べして知っているのだが

木村の自宅は田園調布にあり、凄い豪邸だった。

男は木村の自宅の中に案内された。

「いやあ〜木村さん。素晴らしいお宅ですね」

木村は照れ臭そうに、男にいった。

「そんなことないですよ〜あなたの方がほんとに凄いくせに〜」

木村は思った。俺の隠し財産とか見たら、あの男きつと腰を抜かすだろうな。

そうして、木村は男に貯金通帳、帳簿とか、隠しの金庫とか全てをさらけ出した。

男は、木村に言った。

「予想以上に凄い方だあ〜なかでも、度肝を抜かれたのは、地下室にあつた

金塊の山ですなあ〜」

木村は褒めてもらつて、満足気だった。

「それでは、近々いい報告ができますよ」

そう言つと、男は木村の財産類を手早くカメラに写して自宅を後にした。

それから、二週間後、木村の自宅に朝早くから大勢の男達があつてきた。

男達の一人が玄関のチャイムを鳴らした。

「はい、どちら様でしょうか」とメイドが対応した。

「国税局の者ですが、捜査のため、自宅に入らせてもらいますよ」と言つて、男達は木村の自宅に消えていった。

そう、銀座でのあの男は国税局の敏腕マルサだったのだ。

男はニュースで見っていた。

そしてこう言つた。

「銀座でいくら、使つても木村からしぼり取れる、追徴課税の支払いを

考えたら安いものだな」

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8930b/>

フェイク

2009年6月25日16時35分発行